浮羽先哲遺稿 二

159
113

159-113
1200901382578

先哲叢書

東都獨逸學派

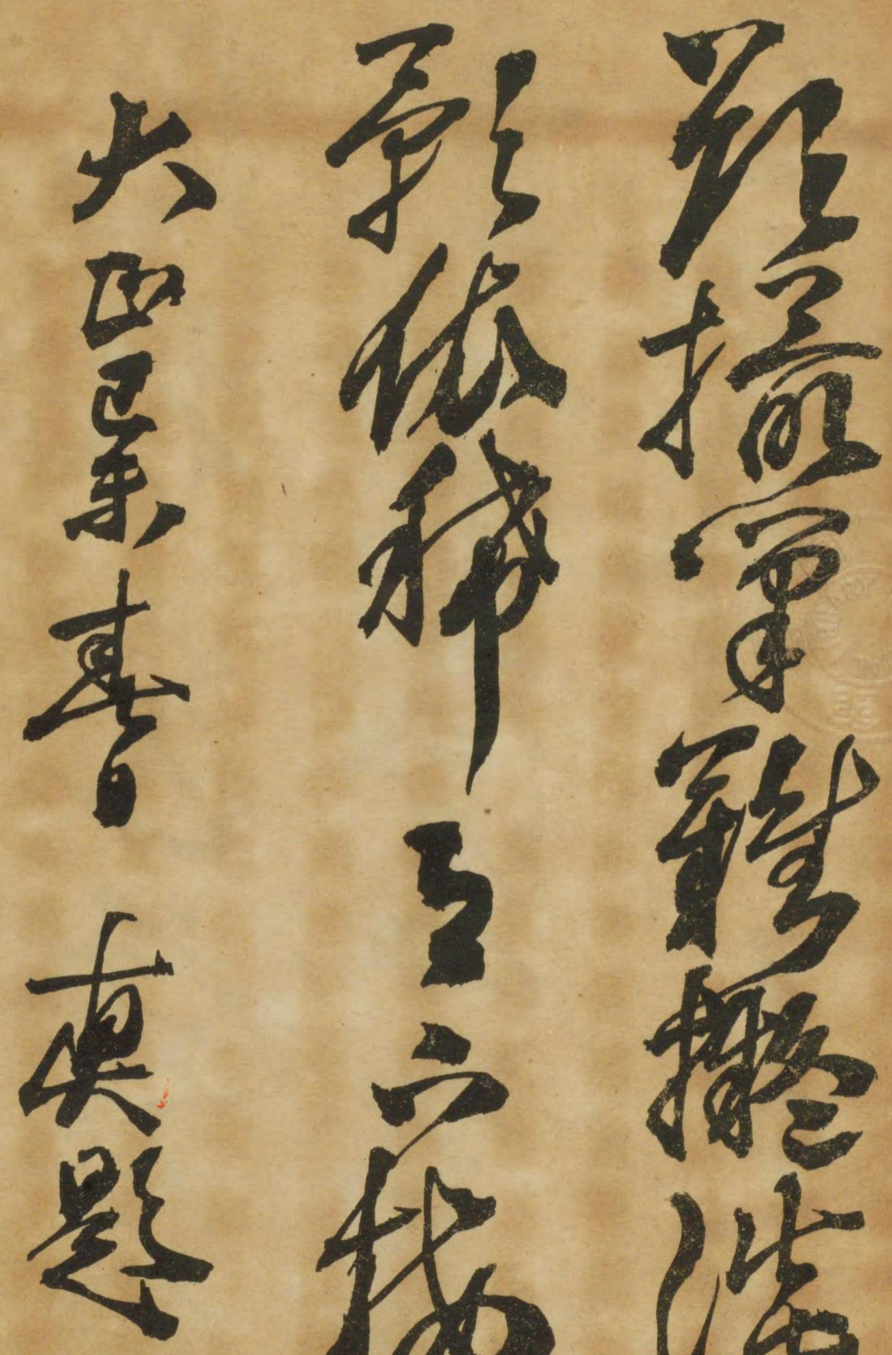
石門易方

大正
8.4.24
内交

159-113

先哲叢書

大正
8.4.24
内交



浮羽先哲遺芳

祭浮羽先哲文

維大正八年　月　日、浮羽史談會員一同設壇場、倣鄉黨尙齒之禮、安釋鳥道師外十四哲之靈、献清酌庶羞之奠以祭焉。本會曩就郡內儒林纂述、得十哲之傳記。爾來續稿、今又錄十五哲以次。其中於佛門得七哲、曰釋鳥道師、奇警絕類、起波瀾於平地。曰古賀大賢師、教學拔萃、孝弟切至。曰福田大然師、研學如騁駟、布

教不緩轡。曰釋圓鑑師、唱主家大事、三代盡誼。曰細川千巖師、領法門之極致、一派爲之寄。曰關謙光師、德學兼備、凡聖受賜。曰佐野前勵師、果然偉器、能貫其素志。於杏林得四哲、曰岩永春齋先生、講學搴幟、闔郡覺睡。曰藤田丈庵先生、進取附驥、研究折臂。曰豐田醉古先生、潔廉爲鞴、光焰似彗。曰山本耕雲先生、博聞强識、適宜措置。於其他又得四哲、曰菊竹剛不吐齋先生、峻嚴自治、最老理智。曰後藤筑水先生、屈醒陶醉、權貴不媚。曰小野竹舍先生、至誠不貳、勤王之念殊熾。曰吉瀨瑞石先生、温純周緻、餘澤遠洎。」觀先哲之所寘、雖由天資之嗜、皆以苦學遂、嘗辛酸、忍困匱、向精神界猛進如鷙、以闡前人未闡之秘、其難非今之假航空機以翱天者比、排幾多障害不辞危惴、非如彼用裝甲自動車以超乘敵之塹壕易也。今人多厭苦學、否寧以爲媿、視其所憙、美服芳餌、優遊放恣、爲之師者亦導以朝三暮四、如此而僥倖萬一者蝟毛不啻、豈不類兒戲乎。是果不可避乎。如頃者暴民騷擾、又非可忌乎。是德之棄也、義之墜也。夫

先哲之敦于德、强于義、固國之粹也。不關有此國粹而不能救者、怠之鼓吹也。故能鼓吹之、以醫現代思潮之痺、使彼輩知非違之不可冀、誰敢異議。而討伐彼輩、不待流汗流血之師、只此世人同情一掬之涙、當數百萬之鐵騎。抑科學萬能主義之不可、依獨逸今回之顚躓、無遺憾見示。先哲以德義爲利、而其成俗也淳懿。今人以實利爲利、而其弊世也澆季。故余輩大欲鼓吹德義、而爲之也自報本反始始。拜崇祖先、不取其形式而取其意、克述克嗣、則是先哲既萎而未曾萎也。今也春風駘蕩、花紅柳翠、髣髴見先哲於其位、愈覺遺芳之馥郁衝鼻。靈乎尙享。

大正八年　月　日　石井眞太郎

此篇祭時所讀錄以代緒言

釋鳥道師小傳

師、氏は某、通稱は鳥道、一華と號す。惠忠はその諡なり。本何許の人なるか今不明なり。正德元年を以て生る。日向の古月師に師事す。天資超悟、奇警百出、動もすれば長者を凌がんとす。古月師偉器得難しと爲し、その晩成を期して痛く之を抑へ、假令賞歎すべき言行をも嘗て許すことなかりき。斯くすること數年なりしかば、學に禪に畏るべき進歩をなし、却て古月師をして後に瞠若

たらしめたり。後來りて本郡大生寺第八代の住職となる。爾時白隱法道の名聲斯界に轟き、僧徒爭うて之に趨る。師も亦出でて就正せんと欲す。古月師乃ち介書及び自著の書一卷と若干の旅費を與ふ。師携へて途に上る。舟中無聊彼を思ひ此を想ひ、既往の冷遇に由りて介書の內容を揣摩し、己の前途に利あらずと爲し、遂に偷見したるに、豈料らんや多年不可解の古月師筆を極めて己を稱揚し、殆ど讚辭の限りを盡し、以て著書を併せて白隱老師の鑑證を請はんとしつつあらんとは。是に於て疑雲頓に晴るると同時に以爲天下復た畏るるに足る者なしと、慢心勃發し托書を披き一葉を讀めば之を破棄し、隨ひて讀めば隨ひて破り復一葉を存せず。駿州松陰寺に到り知らざる體にて介書のみを呈す。老師別に托書あらんと詰るや平然對へて曰く、舟中一覽他の異を認めず、因て水葬に附したり、請ふ一讀せんと、暗誦一過一字を誤らず。老師も亦時を待ちてその鋒を挫かんと欲す。師住庵すること三年、寛保三年秋老師會〻遠州貞永寺の請に應じて安居す。九十餘の僧徒悉く赴く。老師爲めに大燈錄を講じ、獅子吼無畏の說を揭げて鉗鎚を加ふること頗る猛烈なり。

氣絶するもの少からず。師時に歳三十二、擢でられて衆上に在り。老師惡辣の手段を設けて師を攻擊すること甚だ急劇なり。師支ふること能はず、忽ち禪病を發し、精神恍惚一時退會せり。而して老師は更に播州龍谷寺の請に應じ虛堂錄會を開く。師即ち病を推して隨行す。機鋒尙ほ嶄然として一頭地を抽けり。然れども病勢日に募るを以て已むことを得ず別を告げ、飛彈の某々両衲に護せられて歸山せり。狂態發作の爲め檻禁せられしもの六年、その間辛酸を嘗め盡くし、幾回か死生の際に出入し、遂に以て大悟徹底して

病幾んど全癒し、定魔鍊毒を著はし大に宗旨を發揮し、且つ學徒を激勵するに至れり。近境に一浪士あり。師の大德に歸依し常に朱鞘の大刀を佩びて來る。師曰く、山門何ぞ此の長物を用ひんと。浪士曰く、是れ武士の魂須臾も離すべからずと。師揶揄一番して曰く、長物は拔くに便ならず、君能く拔き得ば衲拜見せんと、浪士憤起將に拔かんとすれば、師急に中啓を以てその手を抑へ敢て拔がしめず、之を室の一隅に壓迫して恁麼と呼ぶ。浪士屈服刀を脫して謝し、愈〻その人の畏敬すべきを知れり。師は操履綿密にして

所謂千里眼を具せり。今日來賓あるべし、汝等心せよ、と云へば果して來賓あり。今日無常の風吹きたり、と云へば必ず葬儀の通告に接す。近村の某參詣途上巨瀨川を過ぎんとす。偶〻雜魚の群するを見て心動き石に踞し烟を喫し、殆ど我を忘る。忽ち參佛の途なるに驚き匆々去りて山門に入り、禮拜了りて師に謁し喫烟すべく頻りに腰邊を探る。師微笑徐に曰く、汝嚮きに鱗賊の爲めに烟具を奪はれしを忘れたるかと、某瞿然對へん所を知らずして辭し歸りきと。その透視率ね此の類にして當時活佛の稱あり。天明八年十一月二十九日寂す。享年七十八。

編者云ふ、近世禪林僧寶傳に、鳥道を長堂と書し、且つ多く事實を違へり。讀者誤らるゝこと勿れ。

鳥道文抄 編者云、篇什散逸、今不可得、因代以此抄、

定魔鍊毒 節錄

答舊識問

今時不坐但參、不見性但參、宛如猿猴窺井、曠劫不能捉形矣、譬若磨鏡、磨拭、削磨、々了、滴一滴水銀磨出、則十字街頭、万象森羅、影現內、覆却忽爾無跡、轉變自在、如魔軍亂、似妄想滅矣、況自己大寶鏡、坐磨、眠磨、七顚八倒磨、咳唾掉臂磨、不日擊破心鏡、此時歡喜、向誰語、大丈夫全身、塗胡紛不退、只一氣磨、々、々、磨來又覺透篩焉、日往歲積、万象形儀、有情非情、乃至念佛念想、水

鳥樹林、收歸自己大寶鏡內、尙不打中間底、坐在衲僧本分窟、咦、

松樂寺半鐘銘

陶鑄此半鐘哉、憑據無緣檀信以一樸脫出矣、鞭起愚癡之奴隸、驚警超才居士矣、山神出舞、鴉鳴來語、上震忉犂兜率、下透阿鼻無間、矧其餘紅蓮叫喚燒熱乎、聞無聲々、念無念々焉、是鬼界人畜、器物木魚、飛禽走獸、蠢動含靈、所爲願力之根源也、前大生主現一華鳥道老人記焉、頌曰、

百鍊千鍛、響透十方、一鎚擊碎、含識罪殃、或時五逆、雷吼電狂、項門上眼、非浦陀聲、

地藏菩薩碑

厥分身於恒沙、取化於十方、於三千大千國土中、城市聚落、無朝々不遶到矣、穿耳根、則聞六環金錫響杳空也、又入一百三十六之大地獄、夜々能化六道之衆生、修禪定力、故寶鏡照三世、知者正知是寶焉、故念箭學射之人、轉無間於刹那、而的々穿諸聖腸胃矣、嗟地藏薩埵之悲願、非世寶之可比矣、此故生葉郡妹川村尼瀨名據士鑑重、勸村中道俗、以營建石像一軀、且請文老衲、不肯辞、寶曆十四甲申稔林鐘吉祥日、施主國武

庄左衛門鑑重、石工山北藤八、妹川庄屋國武源左衛門來使我記焉、

岩永春齋先生小傳

先生氏は岩永、名は徽、字は典卿、春齋と號す。通稱は一作、後號を以て行はる。父は市郎兵衛、母は平野氏、延享二年某月某日久留米に生る。幼より讀書を好み、年十四父の功勞を以て俸を受け、父と同じく米曹下吏と爲る。德永某入江平馬に從ひて學ぶ。精苦人に過ぐ。歲三十病を謝して仕を辭し、領內東部の三郡に往來し生徒に敎授す。生徒日に盛なり。後醫術を修め舊竹野郡諏訪村に移り、居ること七年、更に京都に遊び、業を和田東郭に問ふ。三年にして歸り

し時は醫名儒名並び振ひ、門人益〻進みたり。是より先き我が東部三郡には讀書するもの甚だ鮮かりしが、靡然として學に嚮ひたるは先生之が首唱を爲したればなり。その事藩府に聞えしかば金を賜ひて之を賞せらる。先生晩年脚氣を患ひ門を出でざること多年、樂山亭を築き吟詠自ら樂みて晏如たりき。文政三年十一月十六日沒す、歳七十六。著す所、紫霞園詩文集、治驗日錄、日用方鑑、傷寒論國字解等あり。先生樺島石梁翁と交はり最も深し。故にその碑文は翁の筆に成り、末段に「余與先生親厚、殆五十年、容貌溫謹、衣食儉素、接人之忠、處事之篤、一言一行、今猶宛然在目、嗚呼悲哉、辱弟石梁樺島公禮撰」、の文字あり、亦以て先生德學の尋常ならざるを知るに足るなり。配は池尻氏、子なし。阿波氏の子春潮を養ひて後と爲し、醫業を繼がしめたり。

千光寺徑上、傾石處士自英彥山歸、拂石爲榻、

共話山嶽奇勝、

相逢蕭寺寰、正是彥山還、嶽秀靑天外、樓連碧漢間、日華垂下界、物象揭雲關、勝絕昔遊處、因君似照顏、

呈萬苗上人

避世衡門不識春、何思傾蓋一時新、水回幽徑霞懸樹、鶯囀孤村花作隣、望月聊迎蓮社客、栽桃爲擬武陵人、高山但耐題詩競、正是池塘生草辰、

寄萬苗上人、用前韻、

野郭百花春、鶯歌留雨新、莫訝空翠逼、應爲碧山隣、彈瑟俱迎月、題詩却避人、金蘭結交夕、何用卜良辰、

首夏訪永田氏、題假山水、

偶探勝景坐巖扉、自是天工看也稀、風落懸泉烟不散、崖前長有玉龍飛、

咏躑躅花名京錦

不讓蜀江錦、應知吳苑花、可憐爛兮彩、還在陶朱家、

秋日山莊

家居枕水地、門對宿雲山、秋風明月夕、人在畫中還、

冬日野望

冬郊何所見、落照大江長、一嶽衡天遠、千村埋霧亡、風高雁行亂、雪捲騎蹄揚、倚劍異鄉客、回頭更斷腸、

梅

原知梅樹托仙壇、花發瓊瑤欲比難、素影深留塵外色、雅容自有月中看、非關映戶清暉逼、還怪點衣白雪寒、爲耐羅浮春思切、尋常愛爾倚林端、

同遺文

竹下周直君繼配正田氏墓誌銘

是爲周直君之繼配正田氏之墓也。正田氏、諱才、家于米府、父曰吉右衛門正幸、相國有馬要人公之老也。初

疋田氏嫁某而生一女子、有故大歸、正幸再選擇僚寀、從慈父之命、遂爲周直君之繼配、以將一女子而來焉。周直君故有二女、與其所將之女子、齡而育之。疋田氏亦慈之不彼是、造次無有所辨異、旦暮事于舅姑、春秋佐于蒸嘗、無一不以祗敬。及周直君命爲縣長也、日夜在于公事、以故能攝家事無遺缺、可謂宜室家也。生四男一女、長曰直行、字武七、次曰勝次郎、早世、次辰八郎、早世、次曰直信、字正作。先配之二女一夭、而女子三人皆嫁。周直君告老、六年而終。後九年而疋田氏病歿焉、享年七十有八、蓋寛政之元年戊酉閏六月十六日也。

嗚呼、疋田氏於婦道也、肅雍以自處、貞順以正義。其於夫族也、敦睦以致親、恭敬以致和。其爲母氏也、慈愛以施惠、教誨以爲戒、是以家門有則、親戚歸厚、既壽而善終、人誰不哀慕也哉、人誰不哀慕也哉。後二日、祔于周直君之墓。銘曰、

斯是婦德、肅雍貞直、承順慈命、正式婦則。克宜室家、懿德永加、子孫林々、祿祉維多。紫山之前、綠疇之間、佳城欝々、勒石永年。

古賀大賢師小傳

師、氏は古賀、名は大賢、通稱は玄城、東溝と號す。舊生葉郡溝尻村の人、父は惣右衛門、母は小柳氏、安永六年某月某日を以て生る。その胎内に在りたるは七ケ月、一家以て奇瑞となす。果せる哉夙に佛門に入らんとするの志あり。漸く長ずるに及びその志愈〻堅く、遂に父に請ひ同郡滿願寺に入籍し、後豊前正行寺鳳嶺師の門に入り、螢雪の功を積み、進みて高倉大學寮の所化となり、雲華院大含即往院圓龍二師を友とし、宗餘乘を研覈すること十數年、其間日夜精勵

孜々として懈らず、その學階寮司に昇るや、圓龍師と時を同じうし倶に本山の特選にふれり。爾後内に在りては寮舍を私設して地方の僧侶を薫陶し、外に在りては両筑の各地に巡錫して普く信徒を教化し、文政二年秋安居には高倉大學寮に於て金七十論を講述せり。身既に出家たれども孝心深き師には、その父母を喪ふや追慕の念禁ずること能はず、因て長兄三左衞門に父事するは無論近村西見家に嫁せる姉にも母事し、訪問源々として怠らず、その孝その弟、世の冷然たる出家者流と固よりその撰を異にす。後

發憤して益〻法門の奥義を究めんと欲し、一切の世縁を絶ち、長谷の觀音堂に籠居して天臺の宗義を修むること七年、大に得る所あり。再び世に出でんとするに際し、惜しき哉天年を假さず、文政九年十月二十一日、相州小田原誓願寺に於て寂す。享年五十。その編述する所、金七十論撮要及び東溝一夜物語外數種あり。家に藏す。遺物中、源信僧都眞筆の彌陀如來應聲即現像の如きは同僧都三幅の一にして、現に嚴島光明院所藏の國寶と等しき逸品たり。

東溝文抄　編者云、篇什散逸、今不可得、因代以此抄、

金七十論撮要　節錄

文政二己卯秋八月九日

今將釋此論、大分爲七門、一辨論起因、二示宗相承、三明論宗趣、四判論敎體、五解論題號、六審造譯人、七分文釋義、以下畧

金七十論中卷　季秋初日

此第廿四頌第二說我慢、有両頌、今即初也、乃說我慢相、此頌科目、備考據論文科之、是也、維開生義、此但慢之相、謂生根及唯大、是慢相故、以下畧

署上 然有人、林常以十義頌爲第七十頌、恐非論意、所以者何、既聰明人頌云此七十偈論、此是目近行爲、此外有頌、況復言對六万義、非本頌明、且已知實義本句、說盡宗義可見、故又長行合以判等、豈此七十頌乎、己上

文政己卯九月廿三日於上首寮講此訖　東溝大賢

釋大然師小傳

師、氏は福田、幼名は了明、後大然と稱す。南嶽はその號。實は諫山平吉の季子、母は某氏、天明四年某月某日舊生葉郡西原口村に生る。父母俱に匹儔稀なる佛教信者なり、師長ずるに及び四書五經の句讀、三部經の訓讀を習ひ、且つ父老より宗意安心の事を聞き、十八歲の時、同郡西隈上村光敎寺主願惠師に參し、薙髮染衣の身となり、門前大行坊惠雄に父事し、十九歲の時舊上妻郡納又村西光寺の祖師忌に說敎せしを始とし、本山學寮に詰夏したること數回、

享和五年浪華の經歷師柳川眞勝寺に來りて華嚴性起緣起の講義あり。師も亦その席に加はり、同寺の學舍に在ること久しかりき。爾後豐前正行寺皆往院鳳嶺講師の會下に參し、同學舍に留まること亦久しく侍者義讓と交はり厚く、同時に擬寮司を拜命す。又舊三濃郡榎津即往院圓龍師に從學し、學友と謀り學舍を建築せり。舊竹野郡常行寺主願行師は光敎寺の産にして親戚なりしかば、文化年間師滯在講義の旁說敎數十回に及び、斡旋者等歸依淺からず。同寺塔頭壽坊第五代受英子なきを以て懇請し養ひて嗣

と爲す。時に歲三十一、文政三年詰夏上京、同年冬越中開悟院靈昶講師に從學せんと欲して京都を發す。途中大雪に値ひ步行頗る困難、數日を經て漸くその居稻田村に達す。時既に夜、手足感覺を失ひて戶を叩くこと能はず。因て頭を以て衝擊す。家人その異音に驚き開扉したるに、渾身冷却殆ど人色なし。是に於て燎火煖を取り漸く恢復したりと、以て篤學の一端を知るべし。同四年五月高倉大學寮に於て淸凉心要述意を會讀し、夏中寮司に轉進す。歸後專ら布敎に從事し、領內は無論田代領瓜生野本照寺に往來

せしこと六七回、柳川領三池郡の布教も亦然り。曾て同郡に本山より使僧來りて各寺を巡廻し師は説教を中止したることあり。されど夜に入れば聽衆推し寄せて徹宵七日に及びしも尙ほ倦むことなかりき。當時説教の名家肥後の往相寺主卓賢明師屢〻「三池地方奉佛の盛んなるは全く大然布教の結果なり」と云へり。天保年間師自坊に於て教行信證、文類愚禿鈔、淨土論等の會讀を始め日子幾ど一年に渉りしに、日田の德山、唐津の賓藏、その他當時の學者は自國他國より集合して一時令名を博したり。師當役の命を蒙り詰夏上京したること十五回に達し、就中監寮の召狀に講師香樹、雲華両院の副署して「當役相勤多衆被引立御宗意益〻研究有之候樣ニトノ尊慮ニ付云々」の語あるあり。退院後は皆心庵と號せり。雛僧四五輩の請を容れ、毎夜宗意講話をなし、名づけて眞宗要義辨と云ふ。機法一躰以下乃至一念に至る七條目あり。千巖講師一日閲讀し、法類に對して「大然は宗學者なり、殊に三信一心乃至一念の條下に譬喩を設けたるが、その譬喩實際絶妙感佩の至なり」と賞揚したりと。安政六年八月二十四日寂す。享年七十六、配は

林田氏、二女を生み先だちて逝く。繼室山口氏一男一女あり。男受靈その後を嗣ぎ。明治十二年二月二十八日願壽寺に公稱し、同二十四年六月現今の地に移轉せり。

大然零唾

榎津即往院學舍作

諸賢分手榎津隈、蘆岸依々送別杯、悵望雲山青一髮、迢々桑梓幾時回、窓前翠竹動祥烟、佳節欣添又一年、街上雪深無友到、屠蘇酌罷睡陶然、

文政三庚辰神無月の頃、越中礪波郡金戸村專德寺爐邊に在り、時雨烈しく庭前の紅葉風に散り、物淋しきこと云はん方なし。折しも西行撰集鈔の一節妻尼の篇を讀みしに、涙袖を絞

り、二百餘里の海山を隔て遊學しければ、故郷の事思ひ出され、心すごく哀れなる餘り物しける。

古の文見るたひにあはれなる

越路の時雨わかなみたかな

辭世

七十路のはるをふるまてなからへて

のりにそみたる身とはなりけり

釋圓鑑師小傳

師、字は照明、通稱は圓鑑、紫溟と號す。本姓及び父名は不明なり。天明五年某月某日を以て舊竹野郡吉田町に生る。幼にして父を喪ひ、伯父圓鏡（後寮司と爲り京都に客死す）及び母に從ひて田主丸町來光寺に寄托し、剃髪して寺主玄慶の弟子と爲る。文化六年師歳二十五、出でて廣瀬淡窓翁の門に遊ぶ。數年にして去り、筑前龜井苓洲翁に就きて文學を專修すること又三年、業成りて東遊し、京都大學寮に入りて宗乘を研鑽す。講師雲華院の寵眷厚く、擢でられて寮司と爲る。後伊勢

侯に聘せられ藩の士大夫を啓導して令名あり。爾時郷の先輩菊池順次より急に歸山せんことを勸告したるに答へて「予爲人、短於洒掃應對之小節、而長客於公侯大夫。筑國人視僕如塵芥、諺云其子雖壯强、其母視之猶小兒者、其是之謂乎。勢國人尊僕如鬼神、勢國方百里、豈人々皆愚而然耶。云々」、と云へり。此れ自信の篤きと抱負の凡ならざるを見るべきなり。久しからずして主玄慶沒せしかば、榮職を去ること敝屣を棄つるが如く、斷然辞して歸り、嗣子元道を輔佐して先職を繼がしめ、山務を處理し、敢て御寄附寺格の聲譽を墜さざらしめたり。師深く天臺宗の奥義を究む。故を以て妻帶せず。曾て天臺宗の某寺より養子にせんと懇望せしことあり。師「主家大事元道大事」と云ひて峻拒せり。本寺厨屋の前身は全く師の力に成りたるものなり。當時寺社衆に對する公用は、一切代理を許されざるを以て、寺主自ら當らざるべからず。然るに來光寺のみは獨り番僧の師代りて之を辨じたり。蓋し特例と云ふ。元道の子元定に至りては、襁褓の裡に在りし時より懷負して愛撫至らざるはなく。その長ずるに及びては且つ敎へ、且つ敬ひ、

外より歸れば威儀を整へて式臺に迎ふるを常とせり。斯く上は役僧の任を全うし、下は一生を番僧に終り、三代に事へて能く忠勤を盡したるもの他にその比を見ず。されど師の自室に在る火鉢の木炭は、必ず手づから鋸り、割め正しからざれば用ひず。漬物の如きも亦自ら漬けたるものにあらざれば食はず。又以て性格の一斑を見るべし。願壽坊の大然と親善なり。大然は宗學に邃く、師は外典に精し。師常に人に語りて曰く、宗學は之を大然に問へと。大然も亦曰く、外典は圓鑑に質せと。嗚呼此の一掬推讓の美德こそ

真に今人同職相仇視せる彼の精神病者を醫するの良劑なれ。嘉永五年閏二月二十二日寂す。享年六十八。著す所詩文集あり。

謁菅廟

丞相祠堂金碧新、梅飛松茂不忘神、蘋蘩九百年光景、
爭詣東西南北人、
桃花如錦柳如絲、督府何邊尋故基、爲是思川流不盡、
江菅遺愛使人思、

奉吊旭莊先生喪母堂

海微層陰欝未開、懷君春色亦堪哀、趨庭曾是承名教、
移舍況還成異才、憂思寧忘堂背草、淚痕空點墓前苔、
三更獨有幽叢月、腸斷芳魂招不回、

次金谷山妙福寺詩韻

清溪窈窕望氤氲、駐錫洞門此謁君、階下龜泉魚活潑、
霞中花樹鳥芳薰、長生勿待仙人藥、不死須求獅子筋、
金谷山僧轉妙福、法雷轟處諸天聞、

靜夜

南窓讀易罷、獨坐思悠哉、唯有西山月、無人訪我來、
漫成

尾濃還勢攝、木鐸奉天官、男子四方志、何求懷與安、

塞下曲

殺氣侵天日色沈、幾回血戰黑山陰、吾身不惜成枯髑、
本是君恩感激深、

遊東山

霞標起處望悠哉、萬樹瑤花雪嶺開、五種香風吹不斷、
虛空十二寶樓臺、

登良山

高良山上玉垂宮、天遶石屏地勢雄、猶駐松杉風外色、
西征永仰止戈功、

寄阿伯圓鏡在京師

久別愁心與月明、隨風時到洛陽城、君在夢中顏未老、
春還江上鳥空嚶、東海莫違歸棹約、北堂頻作倚門情、

遙知己極玄々理、離索經年總不驚、

甲申元旦

七歲空爲漂泊身、今年偶遇故園春、世間交態人多背、
階外樹花依舊新、

名島

滄溟一望接三韓、猶想龍船蹴紫瀾、鶴渡城邊潮湧處、
千秋萬古石檣寒、

藤田丈庵先生小傳

先生本姓は重富、字は子謙、通稱は某、丈庵と號す、專ら丈庵を以て行はる、寄姓して初め河崎氏と呼び、後藤田氏と更む。父は壽庵、母は倉富氏、天明六年某月某日を以て舊竹野郡樋口村に生る。先生夙に岩永春齋に師事し、後山本十洲の門に遊ぶ。醫は父壽庵に學べり。人と爲り簡傲にして進取の氣象あり。業成りて東遊し、耆宿の門を歷訪してその所見を叩く。幾もなく賴山陽翁と交はる、故に翁の西遊するや、先生をその廬に訪へり。今傳ふる所の幽蘭窠の額面は

當時の揮毫に係る。家業を繼ぐに及び衆望集注し、地方の杏壇を壓倒せしかば來りて治を乞ふ者踵を接ぎ、笈を負ひ業を問ふ者も亦少からず。日田地方の信賴殊に深く、迎送皆輿馬を用ひたり。そは先生至れば先づ家人に「余既に病人を預かれり、復た看護の要なし、諸君休安せよ」。又患者に「憂慮する勿れ、君の生命は大丈夫なり」、この慰安を與へて投劑し、心靈的療方と相待ちて奏効せしめたる結果に外ならざるなり。村内若し葛藤を生ぜんか、先生關係者の家に行きて沈默端坐す。家人恐縮纔に茶を羞め了れば

その事既に解決するを常とせりと、亦以てその人格を推知すべきなり。天保八年八月一日病沒す。享年五十二。先生世の醫家者流の徒らに古法を墨守するに甘んぜず、常に病理又は對症の研究に努め、往々新機軸を出だせり。脚氣療方 胃痙攣 即治方の如き亦その一たり。先生又俳諧を善くす。青洲はその號なり。書は穩秀にして王右軍の風あり。數種の著書及び詩文稿の多くは今散逸せり。配は太田氏、中年猶ほ子なきを以て弟壽山をして箕裘を嗣がしむ、晩年に及びて一子を擧ぐ、虎作と稱す、而して壽山短命

先ちて逝きしかば、虎作長じて終に其後を承け、名を丈庵と更めたり。

呈岩永春齋先生

醫隱誰人得似公、江湖山巒脫樊籠、斬苓暮嘯錦峰外、垂釣朝浮紫水中、詩句原知唐李白、玄經何讓漢楊雄、不妨輿病門如市、因是神方肉骨工、

享和壬戌新年偶題

海湧紅輪曙色明、丹霞縹渺接天橫、春風忽放叢梅動、淑氣頻催黃鳥生、爲是聖朝勞吐握、耐將簡傲樂昇平、自無賀客臻門徑、一曲狂歌弄酒觥、

贈立恭生

聞說平原十日歡、豈如與爾醉詩壇、講經舊自傳三代、
修德方堪叩兩端、高調何人歌白雪、同心無客結金蘭、
願持長鋏枉淹滯、休向孟嘗門下彈、

春日水田別業小集、分韻得花、

岸下紅桃岸上霞、半廻流水半仙家、仙家春色長如此、
風雨人間幾落花、

春日十洲先生有二豎祟、賦此奉慰、

南山風色靜文園、高枕從他啼鳥讙、窓外烟花春縹渺、
林中溪澗水潺湲、絃歌一世人歸德、詞翰千年客滿門、
且有清吟耐瘳病、禁方神藥不當論、

謁玉垂宮

武相靈山幾百尋、儼然層閣擁雲深、五朝柱石傾天地、
四海鹽梅邈古今、茂樹風過翻異彩、好花鳥囀有佳音、
仙寰一自營祠廟、遠近長令髦士欽、

訪某生山莊

武陵源上幾桃花、々色紅蒸水畔霞、誰道此鄉難可到、
却追鷄犬問仙家、

夏日送友人某

縉雲夏五月、送別大江濤、青山晴如黛、南薰入瑤琴、碧
水濶萬頃、絕峰高千尋、千尋似君德、萬頃比我心、天地

何茫々、山水少知音、白玉棄廡下、燕石重襲深、世上何足道、明德我所欽、臨別歌陽關、三疊淚沾衿、去矣行遊子、努力惜寸陰、

題諸葛武侯圖

臥龍神變實豪哉、何遜當年管樂才、一屈將軍魚水熟、終爲丞相冕蓧開、三分割據山河壯、八陣雄圖霹靂摧、萬古精靈長不死、畫中猶覺起風來、

寄懷山陽先生在琵琶湖

琵琶七十里平湖、四面烟山似畫圖、一醉想君漱明月、不知咳唾幾成珠、

豐田醉古先生小傳

先生氏は豐田、字は子崇、通稱は方策、後安拙と更む。醉古は其號なり。父は春律、母は石井氏、文化六年某月某日舊生葉郡吉井町に生る。家世〻醫を業とす。先生幼より學を嗜めども、家貧にして鄉を出で師に就くを容さず。然れども長く雌伏して學ばずば、遂に家を興すの機なきを察し、歲十六奮然蹶起し、廣瀨淡窓翁の門に入る。故を以て學資屢〻空しく同窓生の爲めに理髮或は筆耕して之を補ふに至る。斯くて苦學すること三年頗る得る所あり。一朝境遇の儒に適せ

ざるを悟る。蓋先生農を努め、馬を驅り野に老せるを屑しとせず。又劍を擊ち戟を揮ふの仁に負けるを思ふ、是に於てか家業の醫たるを顧み、翻然意を決し、去りて肥後の深水玄門に師事す。業成るに及び鄉に歸りて藥匙を執る。先生容貌魁偉、賦性潔廉磊落にして文雅を喜み、病弱の爲め藥餌を與ふると共に、亦躬ら奮鬪し筋骨を鍛ひ以て健全に至るの方法を示す。先生既に念を儒に斷ちしも、興到り意會するや必ず詩を賦す。而して之を舊師淡翁に寄せてその添削を請ひ、翁をして「奇韻落々、刀圭餘力難得」、と讚歡せしめたり。曾て上國に漫遊し河內岡元周の家に寓し、諸名士と交はり見聞を廣め益を得たること尠からず。中年後は業務の旁書道を敎へしかば、來り學ぶもの常に堂に塡てり。明治七年五月二十七日病を以て沒す。歲六十六、配は籠田氏、二男二女あり。長男天したるを以て次男貫一家を嗣ぎ、舊生葉竹野二郡の選拔により東京に遊び、醫を修め歸鄉開業するや、郡醫又は衞生委員と爲りて地方の爲めに盡瘁せり。

醉古詩抄

庚戌元旦

韶景一般還向春、凶荒歲後轉傷神、惠風遙仰召南主、移粟何私河內民、酒自有情排積悶、梅猶何意賑清貧、最憐鰥寡兼孤獨、來乞吾醫欲盡仁、

春雨作

愁心鬱勃亂如麻、簷滴聲中喫鼎茶、山帶春寒雲黯澹、樓無晴日雨橫斜、欲歸雁誘未歸雁、已綻花憐將綻花、漸結半宵孤枕夢、遙回千載水邊家、謁玉垂宮

玉殿巍々本壯觀、萬重積翠滴雲端、莓苔迎夏綠愈厚、躑躅送春紅僅殘、祀典菅公傾九國、身從神后伐三韓、忽疑人語起空際、數上百餘高石壇、

寄懷廣孝之助

海西詞藻一家鍾、金石相鳴文燄宗、眼力耿如巖下電、詩才凜似雪中峰、殘花委砌雨聲暖、新綠籠窓鶯語慵、日暮橋頭空竚立、飛鴻杳々去無蹤、

夜過古戰場

陰雲忽覆斗牛星、夾路松杉夜色青、破廟雨濃狐點火、荒陵月黑鬼談經、厲威時告髑髏夢、殺氣猶搖刀劍靈、

懷古低徊不能去、依稀燈暈認荊扃、

冬夜讀書

獨繙陳篇夜僅殘、琅々到曉徹林端、車螢每讀腸生熱、孫雪回思淚有寒、燈穗結花親几案、梅魂飛月落欄干、睡魔頻襲憑何伏、起向茶爐濯鐵肝、

新年

皃々東風茶爾來、今朝仍例學椒杯、春回窮巷老醫宅、勁操依然此野梅、

賀玉元純蒙恩命

一朝應寵命、此日浴恩波、環佩隨鵷鷺、夢魂懸薜蘿、病

輿追跡聚、毒藥奏功多、須思亢龍戒、君勿壓倒他、

石井隆護開宴見招、賦此以賀、

賀筵今日唱謠歌、美酒瓊觴興奈何、身抱奇才憂國久、心存陰德著書多、瞳々朝旭賓盈宴、嫋々春風鵲噪窠、積善看他有餘慶、紫蘭玉樹遍庭阿、

暮春述懷

高樓三月價千金、連旦風煙晴又陰、人與落花容易老、春兼垂柳自然深、已除天馬行空概、未免窮猿投樹心、欲潤粗毫餞佳句、愁思欝々苦沈吟、

雁

遠霄頻使客心悲、切々哀鳴欲訴誰、萬里鄉音何契濶、數行文字忽離披、江頭蘆荻花飄日、空際波濤夜怒時、沙塞屢驚殘曉夢、斜風颯々雨如絲、

送田猛吉省両親

西都風景促春光、行矣遊人詩料忙、捧父文章携白雪、繼家大業究青囊、嶺雲時絡腰間劍、海路或腥懷裏糧、知汝趨庭積功日、斷機怒解慰高堂、

菊竹剛不吐齋先生小傳

先生氏は菊竹、名は義保、通稱は磯八、後忠右衛門と更む、剛不吐齋はその號なり。父孫左衛門久留米菊池家より入りて母たる菊竹氏に贅し、一女一男を擧ぐ。先生は文化十一年某月某日を以て舊生葉郡吉井町に生る。家世〻商賈たり。父後故ありて去りしかば母獨力家業に當り奮勵倦まず、却つて家運を盛んならしめたり。當時にては得難き文字ある婦人なりし故、子女が他の侮を受けんことを虞れ、嚴厲以て之を養育し、又當時地方商家の敢てせざる儒學を企圖

し、夙に先生を廣瀬淡窓翁の門に遊ばしめき。先生學ぶこと七年、偶〻一人の老母に家事を委するの不可なるを思ひ、辞し歸りて益〻講習し、師の教訓を實踐すべく一方家業を努むるの際、同郡延壽寺村庄屋某氏の讓りを承けて勤務し、座右に自書に係る剛不吐齋の扁を掲げたり、亦以て平生の立脚地を見るに足るなり。先生性峻嚴、頗る理智に老け、公文書は無論日誌の如き未だ曾て一日を闕かず、最も精細を極めたるもの山積し、孫博之の村長時代に至るまで、水利土木その他村治上の參考に供し、紛擾解決の唯一資料として引用したりと云ふ。姉は藩の侍醫宇治田雲嶂に嫁せり。斯母ありて斯子ありとは此等をや謂ふべき。文久四年四月十六日沒す。歳五十一、配は平野氏子なきを以て養子辰次郎家職を襲げり。

剛不吐齋零唾（編者云、遺稿散逸、此係宜園百家詩所收、）

贈三原某

常抱希賢學聖情、明窓淨几送餘生、李公敢廢牛頭讀、
蘇子何忘雞口名、擁萬卷書甘似酒、結三益友賴於兄、
衡門鎖在紅塵裏、高枕笑聞車馬聲、

納涼

扁舟解纜出垂楊、江上何邊好納涼、一路芙蓉行不盡、
衣裳歸去尚餘香、

後藤筑水先生小傳

先生氏は後藤、字は起雲、通稱は顯藏、筑水と號す。父は周助、母は柳瀨氏、文化十四年某月某日舊竹野郡惠利村に生る。家世〻學術を以て立つ。先生穎悟にして幼より學を好み、十歲にして既に書畫を善くし、現に當地の八幡神社に掲げある繪馬は十五歲の時の作なり。初め重富繩山に學び、後井上知愚の門に遊ぶこと三年、業成り歸りて家塾を設け子弟を薫陶す。門に及びしもの九百を超えたり。先生博聞强記、篇什頗る富み、書風は他を模倣せず、その固性を發現して

自ら一家を成せり。隱君子を以て自ら居り、絶えて名利の念なし。藩屢〻藩學教官に擬したれども終に起たず。儒學の旁ら皇典を窺ひ以て大義名分を講明したり。維新後歐學漸く盛んにして智識のみ進み、儒教頓に衰へて道德の廢退するを慨し、快々として樂まず、獨清想の極屈原の爲しし所を慕ひて明治五年十一月二十九日沒せり、歲五十六。その擧は素より中行に非らざれども、憂國の念熾烈にして遂に此に出でしは、世の貪慾饜くことを知らざる者をして愧死せしむるに足るものあり。宜なる哉、身を潤ほした

る餘德能く鄉黨を潤ほし、今尙ほ追頌せられて已まざるこそや。配は江上氏、一男二女あり。長子繼次家を承け、蘭醫を修業す。惜しき哉年僅に二十八にして沒せしかば、一時は廢家と爲りしも、孫周祐之を再興し、今豫備役陸軍二等軍醫たり。

筑水詩抄

曉發

狗吠鷄鳴南北移、柴扉未發夢殘時、雲邊剪出鴻三矩、木末斜懸月半規、孤客家遙常鶴唳、長途馬病轉狐疑、板橋霜白風吹面、忽恐薄衣勞母思、

散策

講後相呼出里門、畫成秋景滿乾坤、人過徑腹添新跡、水落橋腰留舊痕、山畔雲歸楓葉寺、牛頭笛起荻花村、曳笻散欝値佳境、笑我沈吟却役魂、

中元

携花又携水、林下謁孤墳、々畔荒凉草、含愁對夕曛、

山中秋夜

茅屋遙臨溪水清、晚來煙靄壓軒生、誰知寂莫山中趣、自得風流物外情、竊菓猿驚剪燈影、纖織窓虫伴讀書聲、今宵無酒又無友、好是烹茶酌月明、

畫梅

菅公遺愛壓甘棠、含蕋窓前送暗香、勿說歲寒松柏後、何如君是傲氷霜、

雪中作

乾坤一望雪華浮、冬來多興好於秋、銀敷凸凹山村路、玉壓高低野寺樓、倚杖朝添東郭履、思人夜棹子猷舟、有詩有畫無邊景、李杜將軍能寫不、

春夜柳園小集

南隣歌舞北隣嚬、此裏家々賞嘆春、簷鐸嗽風聲慰客、庭花步月影窺人、幾年漂泊兼萍轉、一夜團欒與友親、剪燭五更談未罷、忽聞柔櫓下前津、

柳園雜詠、二首、

松風無俗韻、春誦夏弦家、林下園三畝、講餘閑種花、鴻盡家書豈可期、旅窓剪燭憶參差、啼鵑應破故園夢、欄檻梨花月滿時、

春遊

啼鶯語燕報春分、曳杖詩人日作群、楊柳深青孤嶋霧、梨花淡白一溪雲、舞雩臺下逢曾點、曲水流頭對右軍、興到欲題閑援筆、何來蝴蝶幾紛々、

詣善導寺

廬山途不淺、煙霧鎖香臺、深竹棲幽鳥、號松欺薄雷、老僧眉帶雪、古佛脚含苔、謁仰人如蟻、源々慕德來、

七月六日、與圓輹遊紫水、

斷續歸帆帶落霞、漁歌聲裏夕陽斜、傍流長立機心驚、隔浦遙飛反哺鴉、溪口映波千万樹、洲頭藏雨両三家、

優遊好是洗塵慮、藉草支頤幽興賒、

小野竹舍先生小傳

先生氏は小野、名は弘道、字は子禮、通稱初めは勇藏後常雄と更む。竹舍はその號なり。父は定道、母は中野氏、文政五年十二月二日舊竹野郡麥生村に生る。本姓は菅原、先世星野村より來りて小野氏と稱し、當村矢倉八幡宮に奉仕して世襲せり。先生幼より學を好み、天保十二年廣瀨淡窓翁の門に遊び、研鑽年あり。學大に進み、翁に「世奉神者、往々蔑棄漢籍、甚之則讒嫉、無所不至、子禮奉父命、學於予門、其有憂於此乎、其詩文斐然、足以風化世人、自今以後、或將有聞其風而興

起矣、」と稱せしめき。皇典は眞木泉州、船曳鐵門二翁に學べり。慶應三年七月、藩徴して祿若干を給す。明治元年二月增祿、近習班を以て謁を賜ひ、領內の神官部領、又藩學明善校の助教試補に任ず。三年十月藩命を帶び、東都に參出、十二月神祇官出仕、九州各藩宣教掛を命ぜらる。四年權少屬準席、年俸四十三苞を給す。管內地理編輯係となり、六年五月鄕社石垣神社祠官に任す。八月高良神社權禰宜に任し、十八年二月禰宜に進む。二十年六月官制改まり更に主典に任ぜられ、十月復び禰宜に進む。二十五年九月病に

罹り十六日沒す。享年七十一。先生天資溫厚至誠を以て生涯を一貫す。宜なる哉、事に當りて忠實、勤王の念殊に篤く、斯界の儀表たるこゝや。配は藩士村尾萬次郎の女、その娶るや泉州翁實に之が媒たり。その慶辭賀歌今尙ほ存せり、亦以て先生德學の淵源する所を知るに足るなり。詩歌數卷家に藏す。二男五女あり、第四女は天す、その長男列城家職を繼ぎ、曾て推されて水繩村長と爲り聲望を荷へり。

竹舍詩歌抄

題晁衡在唐望月圖

飄然西向去扶桑、螢雪多年在大唐、三笠空思故山月、滿頭還染異鄉霜、堪憐寵遇經玄肅、可羨風流交李王、知否此君歸意切、和歌一曲斷人腸、

紙鳶

飄々高擧幾千尋、郊外晴煙春色深、忽訝天仙來戛玉、也疑神女降彈琴、輕身可羨乘風去、薄命尤憐被雨侵、愧我凌雲志猶屈、對君日暮獨長吟、

至日作

吾是東西南北人、旅中復値物光新、陽纔生一催春意、
歳早送三傷客身、枯柳河邊點青眼、寒梅園裡展朱唇、
沈吟詩就直呼筆、書向鄕天獻兩親、

暮秋雜咏

隣家札々急鳴機、轉覺新寒侵客衣、菊歷重陽花漸老、
楓當九月葉頻飛、鄕天縹渺無音信、世事紛紜有是非、
日暮暗愁方鬱勃、蕭々微雨掩柴扉、

次山口格致見贈韻

何恨簞瓢家本貧、唯憂癡鈍志難伸、請看漢代封侯者、
曾是橋邊取履人、

暮春感懷 時余將歸

鬱勃暗愁難奈何、斜陽影裏獨婆娑、他鄕幾歳嘗辛苦、
故國從今缺切磋、滿地落花春夢覺、一簾飛絮晩風多、
黃昏凭几空惆悵、微雨蕭々濕女蘿、

別宜園諸子

綠樹重陰帶落暉、書窓告別影相依、官遊徒過三年夢、
故國歸來恐斷機、

歳旦

心のみわかかへりても若水に
うつらふ雪の影は見えけり

社頭梅

いろもかも神やしろらん春ごとに
東風ににほへる瑞垣の梅

和琴

六のをのむかしながらの琴の音や
わかしき嶋のしらへなるらむ

秋日同詠草花盛

秋の野の千草ももくさ花さけど
我のみにほふことのはもなし

贈正四位高山正之朝臣一百年

祭に懐舊のこころをよめる

大御代の光りとともにあふくかな
名も高山の高きいさをは

菊契多秋

皇神の、寄しのまにま、外國も、貢奉りし、物はしも、さはなる中に、神代より、吾敷島に、生出ぬ、樹草の花も、大君の、大御心の、なくさとて、捧け奉りし、名細き、菊の花は、も、八千草の、うつろふ比を、おのれのみ、獨りにほへり、皇國に、ふさはしき花、大庭に、處えし花、此花を、ここにめてまし、その花を、ここにめてまし、しか形を、かかけ

給ひて、朝廷への、大御しるしと、常しへに、掟てたまへり、あし原の、瑞穂の國に、千五百秋、萬千秋と、榮え行、大御代のむた、茜さす、朝日ににほひ、かぎろひの、夕日に香をり、御代〳〵の、聖の君の、御心を、なごめ奉れり、御こころを、やはし奉れり、そこ思へは、いとも尊こし、ここ思へは、いとも恐こし、ふさします、吾皇神も、かくそこて、契りましけむ、しかれこそ、雲の上より、東へも、鄙へもなへて、人皆の、めてはやすらし、いさわれも、今日より、ことに、咲にほふ、白菊の花、千五百秋、かけて契らなし、かしこかれとも、

めてはやす今日の圓ゐの白菊の
千年の色は誰によすらん

山本耕雲先生小傳

先生氏は山本、名は正直、字は文安、號は耕雲、通稱は令藏、後公平と更む、多く耕雲を以て行はる。父は亨、母は權藤氏、天保三年九月一日舊竹野郡田主丸町に生る。幼にして重富繩山に學び、後廣瀨淡窓翁の門に入る。才名あり、刻苦勉勵すること二年、去りて熊本の黃玄朴に就きて醫業を修むること六年、此間苦學最甚だし。安政二年又去りて、名古屋醫官淺井九皐の塾に遊び專攻す、幾もなく推されて塾長と爲る。二年にして更に江戸に出でて三島窟の塾に入

り、猶ほ專攻す。時に歳二十六、先生以爲身永く此地に留まるにあらざれば、我が所期を果たすこと能はざらんと、乃ち或人と年俸若干にて約し將に開業せんとせしに、豈料らんや鄉里より母の訃音を傳ふ。是に於て倉卒出發し途上名古屋の舊師を訪ふ。舊師贈るに序文一篇及びその高祖父圖南筆する所の聖號一軸を以てす。序中に「其爲人也、朴實正敏、不狎汚俗、不競名利、一以軒岐之道爲之歸依、云々、又予亦深屬望、朝夕虛襟、以結兄弟交、未曾弟子視之、云々」の語あり。鄉に歸り喪を治め了りて父を奉じ、再び東上せんとせしが父許さず。即ち已むなく自宅開業したるなり。先生多年の遊學に資を要したること尠からず、家產爲めに竭きんとす。加之開業當時は人未だその眞價を認むること能はず、隨ひて治を乞ふ者少く、一時は殆ど窮境に陷れり。是を以て先生發憤その蘊蓄せる學術と、卓越せる技倆とを、遺憾なく傾注せしかば、久しからずして名聲喧傳、門前市を成すの盛況を呈し、遂に以て家を興せり。人生得意なれば多くその舊を忘る。獨り先生は然らず、勤儉朴實絕えて奢靡の風なし。歳五十にして現今の水分村吉田の地に

移住す。明治三十年五月三十日沒す、歳六十六。先生學博く識高し。本草學最邃かりきと云ふ。配は松延氏、先だちて逝く、一男一女を生む。其妹室を繼ぐ、四男三女あり、三男益三郎家を嗣ぎ公共事件に盡瘁し、現に本村助役七ケ町村組合會議員水利組合會議員たり。

耕雲零唾（編者云、先生詩文不存其稿、是僅紙片中所得耳）

予學醫於熊府、遂欲遊三都、父母不欲、他人多讚
吾行、予頗躊躇、因賦短古、寄米府郡利勝、

膽欲大而心欲小、千古確言不可輕、鷦鷯一枝非我願、
願成大鵬凌太清、飄然欲尋名師去、難奈白髮倚門情、

戊辰南至

滿野寒風柳未催、詩人難得好詩材、欲知造物回陽處、
應問南窓一朶梅、

春日郊行

油菜花開媚四隣、田村無處不芳春、一望曠野連天末、

吾亦黃金世界人、

送谷川敬作歸鄉

三杯別酒感何深、亦是平生一片心、我不贈言君莫訝、無弦却勝有弦琴、

送小關玄潮歸長崎

從來君地足奇寄珍、市井縱橫西海瀕、白壁翠樓瓊浦曉、唐船蘭舶霍江春、隔垣知病元仙術、視死別生即聖神、學得軒岐淵奧道、應多種杏報恩人、

憲法發布、賦此記喜、

二千五百五十年、無盡恩風吹藹然、喜色欣々滿朝野、歎聲涌々溢山川、非徒兩院議民政、更向同盟張國權、憲法始頒新日本、東洋應仰是先鞭、

論文

傷寒論六經至勞復、錯雜不純矣、近世醫家者流、爲王叔和之所攙入、而删去之者、居其半矣、較是其爲仲景之原文者、文氣卑弱者往々有之、則果其說之是乎、曰、否、雖文氣卑弱乎、稽其言有徵、驗之事不惑、變化之由表、死生之兆彰、則爲叔和之所攙入、而删去之者、果未知其說之的確也、明吳澄曰、煥然三代之遺文、近世諸大儒亦皆以爲三代之遺文、凡是等之人、至論文章之

更變、則非我醫家所能及、而其言如是矣、仲景雖有醫聖之質、抱超卓之才、漢末之人、而出史遷相如之上、煥然三代之文氣、其可得乎、仲景者以有醫聖之質、抱超卓之才、是等之文辭、當然之理、縱人言之、我不信也、固於文辭、雖仲景乎不能出史遷相如之上也明矣、故論中、文辭淵奧典雅者、是即仲景自序、所謂勤求古訓、博採衆方、編纂古經之文者也、其他文氣卑弱者、仲景自所補入、故或與前條之義、有重復者、是實釋古經之文、重明其義也、然近世醫家者流、爲叔和之攙入、妄删去之、未深察詳考故而已、亦可謂不知叔和者也、近櫟窓多記氏曰、叔和亦一名士也、豈有以我所立論、嫁名於前賢、而爲採摭于已著書中、如毒手狡獪之技倆乎、然傷寒例、（固多不合仲景繩墨、而言屬荒謬者、外臺乃戴其文、揭以王叔和曰、則此一篇、叔和所撰、非敢僞託而作也、）及原文中、或云、疑非仲景方、或云、無大黃、恐不爲大柴胡湯、或本云云云々之類、皆叔和所錄、其語氣爲明顯、此餘盡是仲景舊文、而前後相矛盾、文理晻曖、難曉者、古書往々有之、又何疑焉、此言可謂知叔和者也、非叔和之筆、而係於仲景之補入也、益可以知耳、然則果爲仲景之加入、則論中有所據歟、曰有、作甘草干姜湯與之、或桂枝加芍藥生姜各一兩人參三兩新加湯主

之々類、更下作字、及新加字、以示不古方、則古方之外、仲景新製方以補之者也、若不、則何以稱新加哉、是其明徵也、由是觀之、宜哉、論中錯雜不純矣、然爲後人僞託、而妄取捨之、則可謂慢聖經、又不可不謂仲景之罪人也、

案多記元簡六經至勞復、盡爲古經之文、未可謂的確之論也、故述臆見如此、又辨脉平脉二篇、是爲仲景之筆、豈其然歟、然汗吐下可不可、并汗吐下後證等篇、亦皆爲仲景之筆、未知其可矣、薊溪黃氏云、叔和重集于篇末、比六經中、倉卒尋撿易見也、此說似

吉瀨瑞石先生小傳

先生氏は吉瀨、名は家道、通稱幼は松之助、中は修治郎、後休之助と更む。瑞石はその號なり。父は久之助、母は吉瀨氏、天保三年十二月某日舊竹野郡田主丸町に生る、家世〻商賈たり。幼にして父母を喪ふ。夙に重富繩山の門に入り、後塾長と爲る。數年にして家業の爲め退塾したれども、間を偷み門に趨りて質疑せり。嘉永七年五月繩山の對馬侯に聘せられてその采地田代に赴くや、門人を棄つるに忍びず之を先生に囑す、先生師命に從ひしも家を離れて專任すること能はず、

乃ちその隱宅を以て教場に充て授業したること五年、家事鞅掌已むなく閉ぢたれども篤志者の教を乞ふには敢て辭せざりき。明治五年本郡宰早川立彥學校を興し郡内子弟を教導せしむるに當り、先生與かりて力あり。先生歳五十家を長子修治郎に讓り、力を地方教育に竭さんことを期し、教員と爲り學務委員及び中學校整理委員と爲りて大にその抱負を發揮したり。就中同十七年その學區に良師を聘し校規を刷新せんことを企て、當時の學務委員と經費の許さざる月俸補給の策を講じ、醵金方法を取り五年繼續月賦

義捐を募り、先生その集金を處理して細見保を聘し校長と爲し、大に學校の面目を改め、若干の餘剰を得て基金を殖やしたるが如き、同二十三年組合學區その功勞を感謝して銀盃を贈りたり。是より先き田主丸町には未だ公會堂の設けあらず、先生投貲之を建築せんとす、有志の贊助を得て同十四年一月起工し四月竣る、思誠館と名づけ、朝夕には子弟を集めて書を講ず、前後數十年の振鐸、鄕黨の後進は殆どその薫陶を蒙らざるはなかりき。先生獨り力を教育に竭したるのみならず又常に居町商業の不振を慨し、同志

と議し、明治三年田主丸町振興の趣旨を以て郡有金一千両を借り以て貸金會社を創立し用中舍と命ず、先生推されて監督となる、町民大に便とす、維新廢藩に至り還附解散したれどもその餘澤猶ほ能く東町石橋を架し、その他直接に間接に公益に資したること多かりき。是れ此地金融機關の濫觴にして田主丸銀行の前身なり。先生資性温良純潔、人格最も高し、水旱困苦の歳に遭へば輒ち賤糶し、疾疫窮厄すれば務めて之を賑恤す。又奉佛の念殊に篤かりき。晩年趣味を造林園藝に有し、日々節を南山の別墅に曳き、植樹の間に逍遙し、書を讀み詩を賦し優遊餘生を送る。賈竪外史はその別號なり。同三十八年八月二十二日沒す、歳七十四、配は吉瀬氏、五男五女あり。嗣子修治郎は中島氏を冒す。曾て縣會議員と爲り、又第一期田主丸町長に擧けられ、現に筑後軌道株式會社々長たり。次子松之助は郡會議員と爲り、他は皆一家を成して各〻その業を營めり。

瑞石詩抄

奉和澤總督瑤韻以呈左右、公時在崎陽

宿志青雲助聖謀、藏蹤曾送六春秋、心懷偃武修文道、威服紅毛碧眼儔、大繼八幡親子跡、飽斟萬里弟兄流、休言楠菊呑寃逝、肉得千年枯髑髏、

詠東征疊韻以再呈時征奥之會津仙臺

浴雨梳風贊國謀、膺懲元異正中秋、錦旗輝與旭光似、賊勢滅兼霜氣儔、援戟一天麾落日、投鞭四海遏橫流、英雄遺跡存青史、死士自堪香髑髏、

述懷疊前韻

邪教播來亂國謀、神儒佛典廢興秋、縱施簧舌囁嚅說、
其奈鐵腸鍛鍊儔、元奉祇園三部道、偏斟大谷一心流、
眼前不樂英華法、身後要無鞭髑髏、

謁篠山神祠有感

霜露將零怵惕驚、蘋蘩幣帛共鮮清、筑川烟靄歸宗廟、
篠阜壘墟餘古城、四十年前如父母、一新今日仰神明、
感中有喜君知否、解釋當時默誓情、

山莊晨起

山巔雲帽冒輕紗、凝視漸知石徑斜、遠汲岩泉啓晨寂、
濺來寒供佛前花、

同夜坐

儒家鐵石佛金剛、曾學雙流鍊我腸、欲雨鵶鳴天墨々、
蕭然兀坐占山堂、

同風雨

心醉吟哦代濁醪、寒天山雨氣猶豪、飈風搖撼林梢靡、
鶺攫枯枝立不撓、

和山本耕雲題林田氏紫陽舍韻、以呈守隆兄、

工女雲屯吳漢流、西洋機械亦殊尤、繭追神祖賜頒日、
桑憶孟軻遊說秋、蒸氣簇烟紫江渚、水車飛雨白蘋洲、
四時贏得風光美、月夕花晨好散憂、

嘗長斯區斷若流、斬奸一舉亦其尤、功名范子泛湖後、
貨殖陶公潤屋秋、水潦繅車煩夏閒、天暄蠶婦戀春洲、
絹糸輸出歲加歲、堪補吾邦乏產憂、

初冬思誠館

茶烟影外一身輕、閑逸計中襟宇清、寒菊暗香堪畫意、
水仙靜色入吟情、山巒雨過雲相趂、野樹日斜人耦耕、
寺々鳴鐘頻報晚、誰家朗々讀書聲、

近督菓樹培養、在遂初軒、二月九日雨、終日繙書、

老僕織屨、少僮絢索、婢磨新釜憂々然、塵外之居、
亦猶有所營、戲賦小詩、

避世々隨到、間中亦有營、好書須雨讀、明日定晴耕、

偶成

好皷詩腸花鳥風、任他身染市塵紅、延齡却病術容易、
近在饔餐加減中、

讀感泣淚餘

春邸青蠅來止樊、營々何事穢犧樽、泗濱竊慕文章窟、
岐下夙期仁政源、申舞承歡窮秘奧、鸞衾辞御養英魂、
諫書每納君非去、儉令一施國是存、似帶明河空映戶、
如弓新月疾過垣、雅言覇府桓々日、寸刻勤王不可諼、

細川千巖師小傳

師氏は細川、幼名は善次郎後千巖、又珉淨、伯翁等と稱せしこともあり。法諡は現方、來々子はその號なり。實は坂平兵衛の第二子、天保五年正月二十五日美濃國安八郡南條村に生る。七歳母坂氏に訣れ、九歳同村興久寺に入りて剃髪し、主僧に請ひて「生は既に佛に近い身となりたれば宜しく知海と命名せらるべし」と云へり。十二歳にして得度し、十四歳高倉學寮に入る。十八歳父を喪ふ。嘉永五年一蓮院秀存師に從ひ、宗乘の蘊奥を窺ひ、華嚴を研究す。又俱舍法相を智

積院龍謙師に、天臺教觀を三井寺義範師に學ぶ。劉君鳳の門に遊びて漢籍を修む。頭腦明晰、精力絶倫、而も苦學を以て成功す。その學寮に在るや、他の磨餘の墨片を請ひ廢紙を反して利用し、又筆耕料を得て學資に充て、その最努めし時は、手腕爲めに凝りて自由を失したることあり。弊衣疏食その副食多くは鹽に止めり。斯くて困難と鬪ふこと多年一日の如くなりしかば、二十歳には唯識三十頌を講じ、聽者をしてその博識を驚歎せしめたり。安政三年寮司に任ぜられ、慶應元年本郡の伯東寺故ありて無住の否運に遭遇す、

師會〻布教して地方にあり、其門徒及び法類の懇請を容れ、來りて住職と爲り之を再興せり。明治元年本山命じて外教を長崎に偵察せしむ、乃ち石井某と稱し動靜偵察中、敵の狙擊せんとしたるを僅に免れて歸る。五年教部省始めて三條教則を設け、その義を東京淺草別院に講演せしむ。宗主師を擧げて之に充てらる。官民聳聽感歎せざるはなかりき。是より先き一種非違の徒　勅旨に反し、排佛毀釋論を唱ふ。師慨然として之が折衝の任に當る。幾くもなくその論熄えたり。二十三年宗主の侍講と爲り、二十四年眞宗

大學寮學監に任ぜられ、二十六年堂班上座を許され、二十七年講師に進み、遂に一派の學頭と爲れり。二十八年參務待遇を得たり。三十年病を以て歸國す。適〻本山宗義の諍ひあり。師病を推して命に奔り、數日にして之を鎭定す。同年十一月二十五日中贊教に補せらる。此日病革しく遂に寂す。歳六十四。師風丰柔和にして宛然たる佛相なり。身既に顯要の位置にあるに拘はらず、常に質素に甘んじて毫も驕侈の風なし。その人に接するや、寛嚴宜しきを得て、貴きを憚らず、賤しきを侮らず。殊に慈惠の念厚く、貧困を恤み蓄厄を救へり。その弘教に對する活動は、渾べて献身的にして、生命を賭したること一再ならず。且つ到る處に王法を說きて、聖旨の畏きを徹底せしめ、彼の鹿兒島の如き排佛熱の盛なる地に、佛教を布植し得て今日あるに至らしめたるもの、全く師の力なり。壯年の頃越後の龍巖寮司に從學し、京都清水坂に在り。孜々兀々夜を以て日に繼ぎ、鷄鳴に至らざれば止まず。寮司その修養を試みんと欲し、或夜自ら盜賊に扮してその寓に侵入す。師自若として手卷を釋てず、寮司乃ち數種の器具を搔浚へんとす。師

猶ほ依然たり。終に寮司の手の飯釜に懸かるや、始めて大喝一聲「それ奪はれて可ならんや」と叫ぶ。寮司愈〳〵その度胸に服したりと云ふ。師常に曰はく、世人佛法を以て死の準備談とのみ思へり。故に忌諱の教と爲せり。是れ大なる誤なり。果して死の準備ならば爾く急務にあらず。時到らば自ら死するものなり。佛法は然らず、出生方なれば寧ろ祥慶の教なりと。著書頗る富み、既刊のみにても阿彌陀經、商量記を首め十四五部、未刊は則ち數十種あり。數百の門人中より學師以上の者三十一名を出だせり。配は大谷家々

宰半田掃部の第五女にして一男一女あり。男千靜紹ぐ、壯年にして學師と爲り、中學教育及び軍隊講話に從事せるが、一昨年權大僧都に補せられたり。

千巖零唾（編者云、師於緒餘詩歌、不存其稿、是僅紙片中所得耳。）

明治辛卯除夜有感

殘籍閲終良覺疲、燈花光瘦就眠時、袈裟雖老心猶未、欲固眞宗護法基、

雨後對月

駛雨晴時夢正醒、北山一桁隔江青、凉風吹破炎雲去、忽引月光容小亭、

中秋明月筑紫中洲といへる處にて打ちなかめ侍りて

心から慰みかねつ秋の月

姨捨山はここならなくに
月瀬にてよめる
花よりも名こそあはれにおもほせれ
ひかりにまかふ月か瀬の梅
有明月に寄せて
ふもすからとなふる御名の聲のうちに
四方のほとけもありあけの月
詠蓮
多幾ものの香はかりきよき蓮はに
はちすは愛る甲斐なからまし

關實叢師小傳

師、本姓は杉、幼名は喜三太、後定眞と稱し、中年再び實叢と更む。謙光はその室號なり。故ありて關氏を冒す。父は杉伴藏、母は山手氏、嘉永四年正月元日を以て舊生葉郡古川村に生る。天資聰明、一見魯なるが如きも機を見るや頗る敏なり。生來絶えて肉食せず。常に曰く、余は當に僧と爲るべしと。群童と伍遊するを好まず、超然として物や思ふに似たり。甫めて七歳、父に隨ひて久留米の日輪寺に謁で、遂に出塵の意を決し、父に請ひて寺主九峰師に師事せん

とす。九峰師その器局あるを見て之を梅林寺主羅山師に介し、圓頂進具せしむ。服勤すること五年、出でて米谷春里翁の門に遊び、外典を講究し大に得る所あり。二十一歳、名古屋德源寺瑞應師の室に入り、宗乘を研鑽すること年あり。一夜僧堂に坐して曉鐘の聲を聞き、忽然として黑漆桶を打破す。爾來辛慘苦修すること又數年、業成る。明治八年一旦歸國し、樹王(無學老師)の虎鬚を撫で再來の賞詞を領す。宜なる哉、他年一派の柱石法門の棟梁となることや。既にして長崎に派出し、遂に無學老師に隨行して東京に

遊び、北陸を經て北海道に飛錫す。其の間普く碩學の門に出入して諸子百家の蘊奥を究む。同十三年八月豐後佐伯養賢寺の住職と爲り、聖胎長養す。同十九年本山教學の制を改め、大教院を設くるや、師は興學會長として後進啓導の任に當り竭力する所あり。同二十年八月巡錫して沖繩縣に布教し、歸京の後大教授たること二年に滿つるを以て將に辭任せんとする際、德源寺の請を容れ、五ヶ年を限り輔佐として就職中、同二十四年二月瑞應師入寂せしかば、その遺命に依り三世臥雲軒の後を承け、專ら凡聖を陶鑄す。

その道を慕ふ者四方より輻湊す。傍ら司直判官、陸海軍幕僚にして師の鉗鎚を受けたる者亦尠からず。信男信女のその德に歸依したるは宛も赤子の慈母に於けるが如く、眞に肥後の藩山傳來の遺風ありき。又師の親戚故舊に敦きは出家中多くその比を見ざる所なり。名古屋禪隆寺の臨濟錄會を始め、諸寺院の懇請を受け、江湖會を營みたること十數回、就中沖繩と北海道の巡化は偏陬の衆生をして法澤に浴せしめき。同二十九年本山に於て開堂式を擧げ、再住位に進み、五百六十八世を嗣げり。同三十二年四衆を督して諸國の道俗に謀り、數萬の淨財を得て書院厨屋等を改造し以て山門の風致を完備せしめ、同三十六年一派に推されて管長に就職し、三度法に延陳開旗す。適〻本山に財政問題の興るあり。師乃ち病軀を以て蹶起し、亂麻を裁斷して事將にその緒に就かんとす。而して病勢急轉重態に陷り、自ら起つこと能はざるを知り、侍者に命じて在山の天惠舊師蘆山周嗣及び信徒等を召さしめ、後事を遺囑し三十七年十月二十一日寂す。享年五十四、謚して日宗禪師と云ふ。

實叢詩抄

明治辛卯歲旦

鐘聲百八領袈裟、世界恁麼弄物華、珍重花園正法曉、山雲蓋覆五湖家、

名古屋師團招魂社臨濟宗大施餓鬼會

人生最大　聖恩優、粉骨碎身未足酬、妄語何爲瀆忠士、英靈不朽護神州、

壬辰成道忌

小星落眼已爲翳、光影弄來徒布宣、今日葛藤亦如是、曉風伴下舊山川、

碩天和尚初七日半齋

爛柴拈出熱爐中、說向愁人愁亦同、梅樹不知春信盡、
暗香吹亂落花風、

癸巳元旦

當時柱杖化爲龍、呑盡乾坤入亂峰、却向蓬萊卓然立、
彩雲咄出幾千重、

招魂祭、謹賦一伽陀充義奠之供、

浮世幻身散若烟、功名千古只堪憐、秋風相吊金鱗月、
一劍光寒高倚天、

賀楢崎判事榮轉於大坂控訴院以餞行

是非法令重千鈞、據款結來僞與眞、安治川頭月如鏡、
風塵洗得眼中新、

送判事讚井逸三君任函館控訴院部長

函館春花北海天、想君到日入詩禪、爲雲爲雨難晴處、
心月智光斷瘴烟、

甲午新年

皇風佛日照山河、宿霧瘴煙瞥地和、新歲法輪無礙曲、
甚深般若唱摩訶、

九峰師三年忌

方解深恩養子緣、塵々要報界三千、三々峰頂人難到、

到拈縷香吐黑烟、
帝國陸海軍全捷祈禱眞讀大般若會小偈
甚深般若蜜多聲、鎭國護家平不平、怨敵調心降伏日、
倚天長劍閃軍營、

佐野前勵師小傳

師氏は佐野、名は日菅、通稱は前勵、居龍と號す。父は下川善兵衛、母は尾張犬山藩士某氏、安政六年一月十八日江戸に生る。兄弟二人あり、幼にして穎悟、出塵の志あり。六歲にして淺草吉野町正法寺日遊師の許に投す。日遊師一見器許し、自ら子として養ひ佐野氏を襲がしむ。明治八年十月、大教院に入り日薩師の帷下に就く、後轉して池上中教院に學ぶ。十四年三月業を卒へ、十九年師跡正法寺を襲ぐ。日董師の北越檀林に請ぜらるるや、師は助教師と爲りて赴任す。

後思ふ所ありて性相及び淨土教を京都知恩院に學ぶ、時に本間海解中洲日振両師も亦在り、而して師は大に時運の趨勢に鑑み宗門の前途を察し、乃ち海解師と議し、二十一年秋蹶然起ちて合末論を唱へしも事の成らざるを慮り、獨り去りて本郡の本佛寺に住職す。偶〻安塲福岡縣知事、湯池福岡第二十四聯隊長の首唱にて元寇記念碑建設の議あり、而して師は龜山天皇及び宗祖日蓮大師の銅像を建設して元寇の記念と爲さんと欲し、志士と謀り、乃ち大に立正安國の大義を天下に呼號し、十數年に渉り殆ど寢食を忘れて東西に遊說し、幾多の曲折を經て遂に竣工す。その費實に三十萬圓を要し、三十七年十月除幕式を行ひたり。巍然たる銅像は立正安國論の一卷を捧げ、博多灣頭玄海洋を睥睨して千代の松原なる白沙青松中に聳立す、此れ敵國降伏閣浮統一の祖意を寓し、元寇好個の記念たると同時に、帝國形勝の地に一偉觀を添へて異彩を放てり。是より先き二十七八年戰役後二閱月、師朝鮮に航し、王女及び大院君に說き、尋ぎて皇帝に謁し、法華經及び立正安國論を献じ、遂に僧侶入城の禁を解かしむ、此れ蓋李朝五百年來嚴乎たる

國禁、然るを一朝師に依りて解除するを得たるは、固より朝鮮史上特筆すべき事に屬す。師又宗門興隆の大經綸を懷くこと久し、四十三年夏推されて宗務總監となり、管長大僧正旭日苗師を裨けて大に爲す所あらんとす、十二月先づ朝鮮に入り、日韓併合後の國情を視察し、痛く鮮民啓導の急切なるを感じ、四十四年一月臨時宗會を召集し護法協讃會を起し、宗門教學基金五十萬圓の財團設定の議案を提出して協讃を得、爾來期年ならずして十餘萬圓を募集したり。師又東京感化院を讓り受け、特に感化事業に盡さんとす。北海道に法華村を創設し宗教移民を企て、先づ山梨縣の罹災者百餘人を移住せしむ。師又安房國清澄山旭森に於ける門宗記念の保存を圖り、竭力する所あり。大正元年九月七日寂す、歳五十四。人と爲り超邁鋭果、その事に當りては快刀亂麻を斷つの概あり。始めて宗務總監と爲るや、擧宗刮目その大有爲を期待す、果せる哉師は多年の蘊蓄を傾倒して著々實行の緒を啓き、栖々皇々席暖なるに遑あらず、夫の三教會同の若き、全く師率先して隱然牛耳を執り、重きを各宗の間になしたるに外ならずと云ふ。

前勵餘唸（編者云、師雄心落々、不事詩文、因代以此、）

日蓮宗革命黨檄文（節錄）

夫レ法華ノ諸經ニ王タルハ、諸子ノ熟知スル所（上畧）ナリ。其王タル所以ハ何ゾヤ、開三顯一是ナリ。其レ然リ、天ニ二日ナク、國ニ二王ナキガ如ク、本宗寺院ニ於テモ亦然ラザルヲ得ズ。抑身延ハ宗祖棲神ノ靈場、一宗ノ總本寺ニ非ズヤ。然ルヲ宗中ニ於テ猶四十餘箇ノ本山アリテ牛角ノ勢ヲナシ、互ニ自山ノ威權ヲ弄シ、宗務ヲ掣肘シ、情實ヲ主張シテ、本宗ノ前途ヲ顧慮セズ。興學布教ノ念ナク、唯〻自山アル

ヲ知リテ、日蓮宗アルヲ知ラザルモノ、滔々タル天下概ネ其人ナリ。之ヲモ忍ブベクンバ、何ヲ忍ブベカラザラン。來レ諸子ヨ、吾黨ニ一臂ノ力ヲ副ヘテ、合末論ヲ主張セヨ。中略諸子ハ祖訓ヲ記臆セルカ、祖訓ニ云ク、日蓮ガ弟子檀那ハ、自他彼此ノ情ナク水魚ノ思ヲ爲シ、異體同心ニシテ妙法ヲ修行セバ、廣宣流布ノ大願モ成就スベシト。此文ニ既ニ弟子檀那ト云フ、何ゾ信徒ノミニ教訓シテ、僧侶ハ實行セズシテ可ナランヤ。諸子ヨ、既ニ祖訓ヲ念知セバ速ニ合末論ヲ主張シテ貴族合議ノ舊制ヲ打破シ、十界平等ノ公義ニ基キ宗制ヲ改良シ、教學ヲ振起シ、將來宗風ノ隆昌ヲ圖リ、安國利民ノ基礎ヲ今日ニ開カバ、佛祖ノ本懷ヲ滿足セシムルニ至ラン。諸子來リテ助力セヨ。

日蓮宗革命綱領

吾黨ニ於テ擧行スベキ條款ハ、左ノ逐條ニ仍テ履行ス。

第一條　謹ミテ吾宗祖ノ遺訓ヲ奉ジ、宗規ヲ釐正シ、興學布教ヲ隆盛ナラシムルコトヲ吾黨ニ於テ決行スルコト。

第二條　吾黨ハ財産身命ヲ惜マズ、以テ合末論ノ意見ヲ公示シ、同志ヲ社會ニ求メ、教令一致ノ權ヲ斷行スルコト。

第三條　吾黨ハ興學布教ヲ盛大ナラシメン爲メ、理財法ヲ改良シテ財政一途ノ制度ヲ謀ルコト。

第四條　吾黨ハ舊來ノ獨立本山ヲ以テ祖山ノ別院ト爲シ、單ニ祖山一本寺ト爲スコト。但之ガ方法ハ左ノ各項目ニ仍ル。

第一項　諸山ヲ遊說シ、末寺合一ノ議ヲ勸告スベシ。

第二項　地方寺院ヲ遊說シテ、本山ニ向ヒテ離末上願ヲ勸告スベシ。

第三項　地方遊說ノ信徒ニ合末論ノ趣意ヲ懇諭スベシ。

第五條　吾黨ハ舊來ノ本山會議ナルモノヲ全廢シ、更ニ選擧法ヲ制定シ、苟モ一時住職以上ノ者ハ、能所選ノ權ヲ有シ、此住職中ヨリ廣ク議員ヲ選擧シ、宗教ノ擴張スルコト。

第六條　吾黨ハ右ニ列記スル逐條ノ目的ヲ實行セン爲メ、各地有志ト氣脈ヲ通シ、新聞演說等ノ

手段ヲ以テ社會ノ輿論ヲ興シ、以テ吾黨ノ目的ヲ達セントス。

以上ノ目的ヲ達セン爲メ、種々ノ艱難ニ逢フトモ其說ヲ變セズ、榮辱ノ爲メニ其約ヲ違ヘズ、斷乎トシテ動カズ、誓ヒテ革命ヲ決行スベシ。

明治廿一年八月

氏名	年齢	住所	職業	年月日	年齢	住所	職業	年月日
平田刃	一	宇田川	大工	明治二十一年八月十八日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月十八日
吉瀬刃	廿一	力田	大工	明治二十一年八月十八日	六八	大阪	大工	明治二十一年八月十八日
宮田刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十七日	六六	大阪	大工	明治二十一年八月十七日
岡田刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十六日	六八	大阪	大工	明治二十一年八月十六日
藤田刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十五日	六六	大阪	大工	明治二十一年八月十五日
山口刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十四日	六八	大阪	大工	明治二十一年八月十四日
中村刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十三日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月十三日
中村刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十二日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月十二日
中村刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十一日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月十一日
中村刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月十日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月十日
中村刃	廿一	大阪	大工	明治二十一年八月九日	六一	大阪	大工	明治二十一年八月九日

自分ノ名ヲ自筆ニ書ケル者ハ、次ノ通リデアル。

目的ト吾黨ノ目的トモ以テ興シ、以テ輿論ヲ興シ、以テ社會ノ輿論ヲ爲メ、種々ノ艱難ニ逢フトモ以上ノ目的ヲ達セン爲メ、榮辱ノ爲メニ其約ヲ違ヘズ、斷乎トシテ動カズ、誓ヒテ革命ヲ決行スベシ。

其說ヲ變セズ、以テ手段ヲ達セントス。

明治廿一年八月

浮羽先哲年譜

氏名	父	母	生年月日
釋鳥道	某	某氏	正德元年
岩永春齋	市郎兵衛	平野氏	延享二年
古賀大賢	惣右衛門	小柳氏	安永六年
福田大然	生父受 諫山平吉	某氏	天明四年
釋圓鑑	某	某氏	天明五年
藤田丈庵	壽庵	倉富氏	天明六年
豐田安拙	春律	石井氏	文化六年
菊竹磯八	孫左衛門	菊竹氏	文化十一年
後藤顯藏	周助	柳瀨氏	文化十四年
小野常雄	定道	中野氏	文政五年十月二日
山本耕雲	亨	權藤氏	天保二年九月一日
吉瀨休之助	久之助	吉瀨氏	天保三年十二月
細川千巖	坂平兵衛	坂氏	天保五年正月二十五日
關實叢	杉伴藏	山手氏	嘉永四年正月元日
佐野前勵	生父日遊 下川善兵衛	某氏	安政六年二月十八日

備考　豐田安拙以下關實叢ニ至ル、修ムル學ハ皆淡門ノ流ヲ汲ミ、他ハ各自

氏名	父	母	生年月日	距生年	没年月日	距没年	享年	妻	子女 男	子女 女	子女 計	繼嗣	住所
釋鳥道	某	某氏	正德元年	一九九	天明八年十一月二十九日	一三二	七八						
岩永春齋	市郎兵衛	平野氏	延享二年	一七五	文政三年十一月十六日	一〇〇	七六	池尻氏				故人義子春潮	舊竹野郡諏訪村
古賀大賢	惣右衛門	小柳氏	安永六年	一四三	文政九年十月二十一日	九四	五〇						
福田大然	生父受 諫山平吉 莫	某氏	天明四年	一三六	安政六年八月二十四日	六一	七六	林田氏 繼山口氏	一	一	二	受靈	田主丸町
釋圓鑑	某	某氏	天明五年	一三五	嘉永五年閏二月二十二日	六八	六八						
藤田丈庵	壽庵	倉富氏	天明六年	一三四	天保八年八月一日	八三	五二	太田氏				故人弟壽山後實子丈庵	舊竹野郡樋口村
豐田安拙	春律	石井氏	文化六年	一一一	明治七年五月二十七日	四六	六六	籠田氏	二	二	四	故人貫一	吉井町
菊竹磯八	孫左衛門	菊竹氏	文化十一年	一〇六	文久四年四月十六日	五六	五一	平野氏				故人義子辰次郎	舊生葉郡延壽寺村
後藤顯藏	周助	柳瀨氏	文化十四年	一〇三	明治五年十一月二十九日	四八	五六	江上氏	一	二	三	故人繼次	舊竹野郡惠利村
小野常雄	定道	中野氏	文政五年十二月二日	九八	明治二十五年九月十六日	二八	七一	村尾氏	二	五	七	列城	水縄村大字益生田
山本耕雲	亨	權藤氏	天保二年九月一日	八八	明治三十年五月三十日	二三	六六	繼松延氏 同氏	一	一	九	益三郎	水分村大字常盤
吉瀨休之助	久之助	吉瀨氏	天保二年十二月	八八	明治三十八年八月二十二日	一五	七四	吉瀨氏	五	五	一〇	修治郎	田主丸町
細川千巖	坂平兵衛	坂氏	天保五年正月二十五日	八六	明治三十年十一月二十五日	二三	六四	牟田氏	一	一	二	千靜	柴刈村大字菅原
關實叢	杉伴藏	山手氏	嘉永四年正月元日	六九	明治三十七年十月二十一日	一六	五四						
佐野前勵	生父日遊 下川善兵衛	某氏	安政六年一月十八日	六一	大正元年九月七日	八	五四						

備考　豐田安拙以下關實叢ニ至ル、修ムル所ノ儒學ハ皆淡門ノ流ヲ汲ミ、其他ハ各自異レリ。

159
113

大正八年四月十六日印刷
大正八年四月二十四日發行

非賣品

編纂者
發行者　福岡縣浮羽郡役所內　浮羽史談會
代表者　石井眞太郎

印刷者　福岡縣浮羽郡吉井町千參百拾六番地ノ七　大津留啓太

印刷所　福岡縣浮羽郡吉井町千參百拾六番地ノ七　丁亥舍